

単元終了後に、評価テストを実施しました。その結果を基に、授業の考察を行います。

大問 1 文章を読んで、自分の考えを書くために、モデル感想文を参考にして「書き技」を見付けることができる。

[illegible][illegible]

資料 1 評価テスト 大問 1

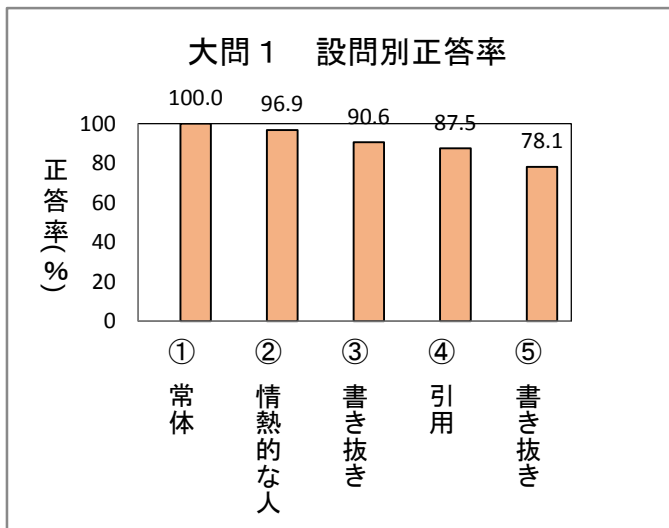


図6 評価テスト大問1の正答率

大問1では、グループでモデル感想文から「書き技」を見付け、それを手掛かりに「手塚治虫」の感想文を書いた場面を再現しました。①～⑤とも70%以上の正答率でした。グループで「書き技」を見付け、「書き技」を参考に感想文を書き、更にグループ発表の前に①～⑤の視点で、互いの感想文を読み合った一連の学習から、「書き技」を通した感想文の書き方の理解は深まっていると推測されます(図6)。

大問2 学習で学んだ「書き技」を自分の「書き技」として、活用することができる。

[illegible]

[illegible]

20 × 20

表 1 事前テストでの〇〇な人

すごい人	48%
太陽のような人 (本文から引用)	15%
がんばりや	13%
無回答	3%
その他	21%



表2 評価テストでの〇〇な人とそのように思った理由

すばらしい人	18%
すぐれた人	18%
尊敬すべき人	12%
努力を続けた人	9%
才能のある人	6%
正直な人	6%
まじめな人	6%
りっぱな人	6%
熱心な人	3%
まっすぐな人	3%
その他	13%

なぜ、そのように思いましたか。

- ずっと努力をしている人だから。
- 自分にはまねできないりっぱな人だから。
- まねできないことをしたから尊敬するので。
- 1日中ずっと働いていたから。
- 自分の夢に向かっているから。
- かしこくて、よい人だから。

大問2-①では、表1のように事前テストで「すごい人」と漠然と記述していた児童が、表2のように「ずっと努力をしている人だから」「自分には真似できない立派な人だから」などと根拠をもって「すばらしい人」「尊敬すべき人」と記入することができていました。伝記に書かれている事実描写に合う適切な言葉（「ぴったり合う言葉」）を選び、語彙を増やそうとしたことが分かります。

大問 2②の結果と考察

表 3 大問 2-②「自分と結び付けて書くようになるか」の結果（複数解答）

自分と結び付けて書くための視点	評価テスト
ア 自分は、～と思う。・・・自分と似ている・違う・同じという心情面での視点で記述している。	33%
イ 自分だったら、～する。・・・具体的にどのように行動するのかという視点で記述している。	94%
ウ 自分は、～をまねしたい。・・・生き方から学んだことを記述している。	22%

事前テストにおいて、自分と結び付けて書くことができた児童は 18%でした。大問 2-②では、自分と結び付けて書くことができた児童は 94%でした。自分と結び付けて書くための視点に沿って、記述の内容を見ます。

アの視点について

「自分は～と思う。」という視点では、「もし、ぼくだったら自分を苦しめて人のためにしようという気持ちはあまりないと思います。」「わたしだったら、とうていできないと思います。」など、自分の生活や経験と結び付けて感想を記述していました。

イの視点について

「自分だったら、～する。」という視点では、ほぼ全員が記述できており、「私だったら農民どころか教師もやめないと思います。」など、宮沢賢治の行動に対して、自分が同じ立場だったらどうするのかを具体的に記述していました。

ウの視点について

「自分は、～をまねしたい。」という視点では、「賢治が農民のために、人生をかける生き方をしたことにはびっくりしました。」など、「人のために自分が苦しんでも・・・」と、宮沢賢治の生き方に触れ、自分だったらどうするか、自分の思いや考えを記述していました。

このことから、自分との共通点や相違点を挙げるだけでなく、自分と結び付けて書く視点を基に、対象人物の生き方や考え方に気付き、自分の考えをより明確にもつことができるようになってきたように思われます。

(2) 振り返りのアンケート

単元終了後に、児童に意識調査を行いました。その結果を基に、授業の考察を行います。

あなたは、「伝記を読んで『すごい』を伝えよう」の学習を通して、以下のことは分かるように（できるように）になりましたか。自分のことを振り返って答えましょう。

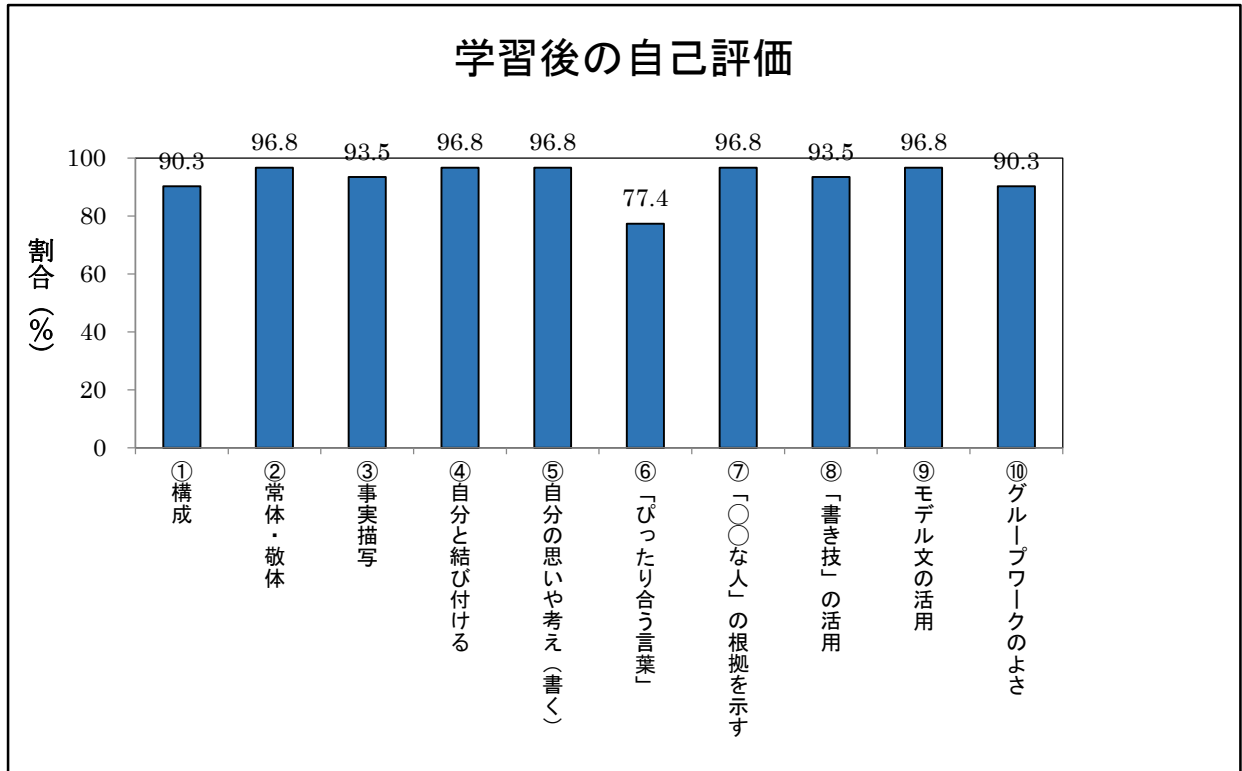


図 7 学習後の自己評価

学習後の児童の自己評価を見ると、10 の項目全てにおいて、多くの児童が「分かる（できる）」と自覚しています。モデル感想文を参考にした「書き技」の有用性については、93.5%の児童が有用性を感じています。分かる（できる）ようになったことの自由記述においては、以下のような内容が多く見られました。

- ・感想文がすらすら書けるようになった。
- ・感想文は苦手だったけど、少しだけ好きになった。
- ・マイ感想文を書けるようになったので、どんな時でも書けるような気がする。
- ・自分の文章を書いて、自分の書くスピードや書き方が分かった。
- ・自分の考えを書くのが苦手だったが、人物と自分を結び合わせて考えることができるようになった。

「ぴったり合う言葉」を選ぶことについては、77.4%の児童ができるようになったと答えています。今後も引き続き「ことばの資料」や国語辞典を日常的に活用させ、語彙を広げさせていくことが大切だと考えます（図 7）。

(3) 「手塚治虫」の感想文とマイ感想文の比較

モデル感想文を参考にして最初にした「手塚治虫」の感想文と、学習読書をした伝記のマイ感想文に使われた「書き技」を比較してみました。本単元では、「引用」することは、全員には、望まなかったのですが、「書き技」の一つとして比較の対象としました。

- 1 原稿用紙 1 枚程度で書くことができるか。
- 2 常体か敬体か、そろえることができるか。
- 3 「始め」「中」「終わり」の構成になっているか。
 - ① 「始め」には、人物を〇〇な人と表すことができるか。
 - ② 「中」には、自分と結び付けて、「自分だったら・・・」や似ている点などを書くことができるか。
 - ③ 「終わり」には、人物から学んだことや真似したいことなどを書くことができるか。
- 4 引用を正しく使うことができるか。

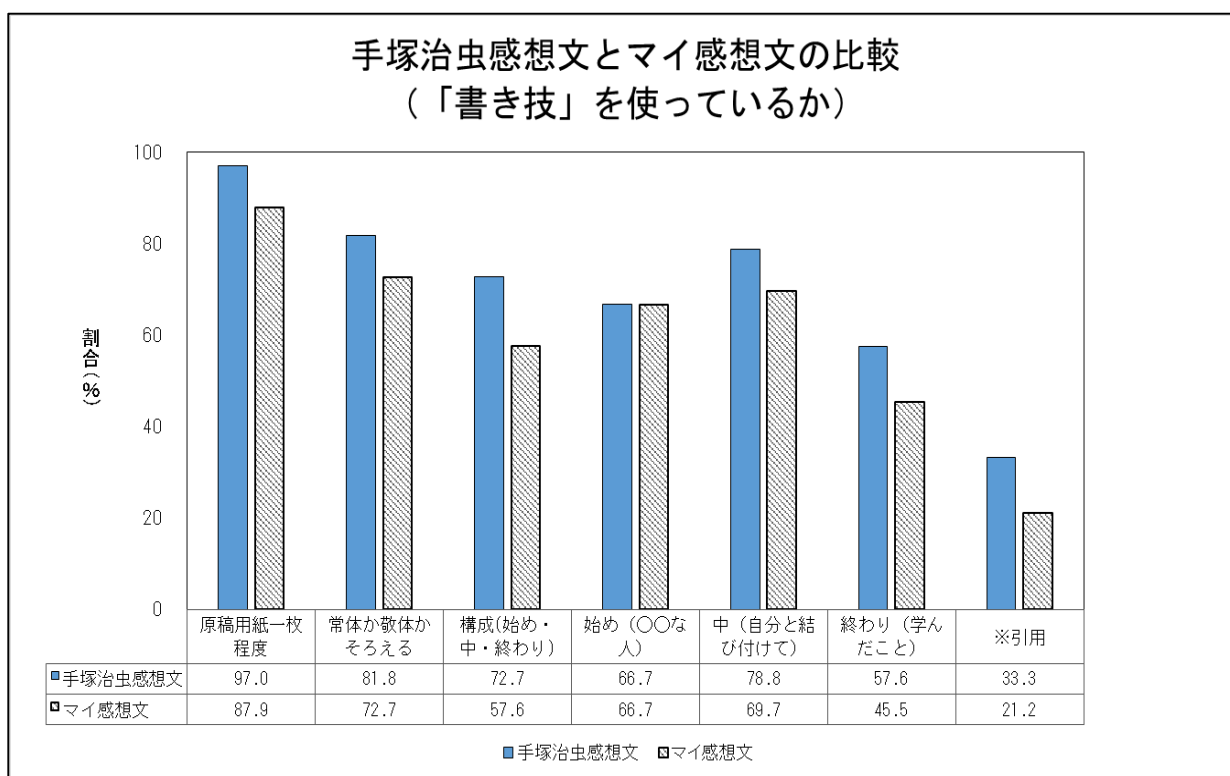


図 8 手塚治虫感想文とマイ感想文の比較

「手塚治虫」の感想文では、スモールステップで学習活動を仕組んだことで、モデル感想文を参考に書き技を使うことができていました。互いに読み合って修正をしたりしながら、書き技について理解できたものと思われます。マイ感想文では、限られた時間の中で、大変意欲的に書き進める様子が見られました。書き技の使用率は、10%前後低くなったものの、ほとんどの児童が、最後まで自力で書き上げることができました。学習読書をした伝記の対象人物を表す言葉については、「貧しい人や苦しむ人たちのために生きた人」「看護のために人生を捧げた人」「サッカーのために全てを注いだ人」など、一つの単語だけではなく、「ぴったり合う言葉」を自分で選び、組み合わせて書くことができた児童もいました（図 8）。

（4）成果と課題

実践校においては、学習状況調査の結果から、以下のように課題を焦点化し、具体的な手立てを考え、授業実践に取り組みました。

○実践校における課題の焦点化

「求められた条件に応じて書くこと」

「文章を読んで自分の考えを書くことや感想を述べること」



○課題の解決に向けて必要な力

「求められた様式に合わせて書く力」

「文章を読んで自分の考えを書く力」



○課題の解決に向けた具体的な手立て

【手立て 1】「宮沢賢治」のモデル感想文を提示し、「書き技」を見付け、参考にさせる。

【手立て 2】 自分の考えを書くことへの抵抗を減らすために、スモールステップで手立てを打つ。

- ・「宮沢賢治」のモデル感想文での学びをマイ感想文につなげる。

- ・読み取りの視点（『すごい』を見付ける視点）と、感想をもたせるための視点（自分と結び付ける視点）を明確にさせる。

- ・語彙を広げるために、「ことばの資料」を活用させる。

【手立て 3】 単元を通した言語活動として、「モデル感想文を参考にしてマイ感想文を書こう」を位置付け、学習読書を促す。

【手立て 4】 児童が考えを広めたり深めたりする場として、一人学びとグループ学びを設定する。

【手立て 5】 振り返りで、キーワードを使って「学習して分かったこと」をまとめさせ、「自分ができるようになったこと」を書かせることで、自分の学びを自覚させる。

【成果】

【手立て 1】 単元の導入で、つきたい力を明確にした「宮沢賢治」のモデル感想文を提示したことは効果的でした。グループごとに 5 つのモデル感想文から見付けた「書き技」をクラス全体のものとしてまとめることで、「書き技」の共有化を図ることができ、伝記を読んで、感想文の書き方を知ることができたようです。

【手立て 2】 スモールステップで手立てをとったことで、読み取りの視点と感想をもたせる視点が明確となり、「自分と結び付ける」とはどうすることなのか理解できたようです。一つ一つの活動の目的と方法が分かりやすく、児童が自分の考えを書く意欲をもち、その意欲を持続して書き進められたと思われます。

【手立て 3】 単元に入る前より、学習読書の環境を整えたことで、マイ感想文への期待が高まっていったようです。感想文を書くという学習課題をもって、マイ感想文に向かって単元を通して見通しをもち、主体的な活動ができていました。

【手立て 4】 単元を通して、ひとり学びとグループ学びの場を意図的に取り入れたことで、対象人物に対する自分と友達の感じ方や考え方の違いを知ることができていました。

【課題】

【手立て 5】 「学習を通して分かったこと」と「できるようになったこと」の視点で振り返りをさせたことで自分の力をメタ認知するようになりました。しかし、グループ学びでの相互評価をすることや、評価テストの内容も含めて、身についた力と自信が次の学習に行かせるより良い手立てを考える必要があると思います。評価の在り方も含めて、次年度への課題としたいと考えています。